かわら版
哲学たいけん

第　35　号
編集発行／碧南市
哲学たいけん村
無　我　苑
所 在 地／碧南市坂口町3-100
〒447-0087：TEL.0566-41-8522
：FAX.0566-41-7761

漱石の揶揄

久野　昭
（国際日本文化研究センター名誉教授、広島大学名誉教授、哲学たいけん村無我苑顧問）

夏目漱石の『吾輩は猫である』で、山の芋の値段が主人と細君との間で話題になる場面がある。

「知りませんわ、知りませんが十二圓五十錢なんて法外ですもの」と細君が言うと、「知らんけれども十二圓五十錢は法外だとは何だ。まるで論理に合わん。夫（それ）だから貴様はオタンチン・パレオロガスだと云ふんだ」と主人が言う。「何ですって」。「オタンチン・パレオロガスだよ」。「何です其オタンチン・パレオロガスって云ふのは」。「何でもいゝ」。

この「オタンチン・パレオロガス」を、手もとにある岩波書店版全集での注解は、「間抜を意味する江戸の俗語オタンチンを、東ローマ帝国最後の皇帝コンスタンチン・パレオロガス（Constantin Paleologus）に掛けた洒落」と、説明している。この説明自体は、間違ってはいまい。だが、私には疑問がある。漱石は、たんに戯作者として、読者がこの洒落を、そのまま洒落として面白がって読んでくれることを期待していたのだろうか。

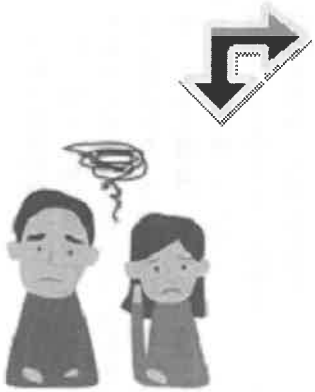
そんなことはあるまい、と私は思う。やがて自分の全集が出版され、それにご親切な注解まで付されるなどとは、執筆時の漱石は予期していまい。ならば、「オタンチン」はよく知っていても、東ローマ帝国とは、ましてパレオロガスとは無縁な読者が、これを洒落と受け取ってくれることなど、どこまで期待できるか。洒落は、読者のためよりも、作者のためではないのか。

念のために歴史的事実を書いておくと、英語風に発音してコンスタンティン・パレオロガスは一四〇五年の生まれ。一四四九年、ビザンチン帝国（東ローマ帝国）末期に皇帝の座に就く。だが、その二年後、一四五一年には、ビザンチン帝国の首都コンスタンティノポリスは、強力なトルコ軍の包囲するところとなった。財産も乏しく、部下の兵士もほとんどいない、圧倒的な劣勢にもかかわらず、パレオロガスは圧倒的に優勢な異教徒どもを相手に必死に戦ったが、一四五三年五月二十九日、城壁上で生命を失ったと、伝えられている。そのパレオロガスを、簡単にオタンチンと決めつけられるか。たとえば手もとの『ラルース大百科事典』は、彼の戦いぶりを「英雄的」とまで評している。

ならば、「オタンチン・パレオロガス」は、このビザンチン帝国最後の皇帝を「オタンチン」呼ばわりしたくての洒落でも、読者を楽しませるためでの洒落でもないことになるのではないか。

私は、ここで、この作者と読者との会話を考えてしまう。「夫（それ）だから貴様はオタンチン・パレオロガスだと云ふんだ」と作者が言う。「何ですって」と読者が訊く。「オタンチン・パレオロガスだよ」。「何です其オタンチン・パレオロガスって云ふのは」。「何でもいゝ」。

ついでだが、その値段の高いのが『吾輩は猫である』中のこの場面の発端になった自然薯（じねんじょ）すなわち山の芋が、なんと鰻になるという表現を、ご存知であろうか。「山の芋が鰻になる」とは、物事が思いも寄らぬものに変わってしまうことの譬えである。



梅原猛名誉村長特別講演会

演題「八十八年の人生をかえりみて」

平成二十五年十月二十七日に碧南市芸術文化ホールにおいて、哲学者で、哲学たいけん村無我苑名誉村長の梅原猛先生による特別講演会を開催しました。特別講演会の詳細については、以下の要約をご覧ください。

一．幼少年時代の私

私は仙台市で梅原半二の子として生まれたが、実母が死んだため、生後一年九か月にして、愛知県知多郡内海町で味噌・醤油醸造業を営む梅原半兵衛・俊夫妻に引き取られ、育てられた。

私はガキ大将の一面をもっていたが、一面甚だ孤独な夢想家でもあった。小学校二・三年のころ、NHKラジオで将棋の駒を使って野球のゲームができることを知り、その遊びに耽った。野球ばかりではなく陸上、水泳などあらゆる競技を将棋の駒で行うことを考え出し、そのような夢想に多くの時間を過ごした。そのためほとんど勉強をしなかったが、学校の成績はまずまずであった。半兵衛は、秀才で通した父、半二の子だからといって私に愛知一中を受けさせたが、もちろん落第した。

私立の東海中学に入り、名古屋で下宿していたが、あまり勉強をしなかった。半兵衛・俊夫妻は「猛は勉強ができないはずはない」といって、一年の二学期以後、内海の自宅から二時間半かかる東海中学に通わせた。私は朝五時半に起きなければならなかったが、俊は四時に起きて弁当を作り、私を送り出した。そのころ、私は俊が実の母ではないことに薄々気づいていた。四時に起きて私を送り出す母のことを思って、急に勉強家になり、一学期はクラスで真ん中くらいであった成績が二学期の中間試験で一躍二番になった。以後、成績は常にトップクラスであり、数学が特にできた。

ところが中学三年のときに川端康成の『十六歳の日記』を読み、自分が人生について何も知らないことが分かった。人生は数学より難しくかつ興味深い、と考えた私は、文学書ばかりか哲学書、宗教書をも乱読し、受験勉強が疎かになった。そして理科志望から文科志望に変えた。

当時、「中学四年で旧制高校八高に合格できるのは梅原くらいだ」といわれたが、四年と五年で二度、八高を落ち、一年浪人して八高に入学した。

このように私の人生は決して学校秀才の順調な人生ではなかった。ちなみに、ニュートンもエジソンも学校の成績は「中」以下であったという。創造的な才能の持ち主は、学校では必ずしも優等生ではなかった。

半兵衛は政治好きで、私を東大の法学部に行かせて政治家にすることを望んだが、私は「この世の立身出世を望むなら東大、千年の真理を求めるなら京大」と豪語して、西田幾多郎というすぐれた哲学者が教鞭を執っていた京都大学哲学科に入学した。

二．私の学問

私は、四十歳までは主に西洋の哲学を研究していたが、四十歳以後は主として日本の思想の研究をした。それは、日本思想のなかに将来の人類が必要とする原理が隠れていると考えたからである。しかし日本思想を理解するのに約五十年が必要であった。

① 八世紀の日本の研究

四十代の後半、私は憑かれたように古代日本研究の書を三冊書いた。刊行順にいえば、『隠された十字架―法隆寺論』『水底の歌―柿本人麿論』『神々の流竄』（古事記・日本書紀論）である。

『隠された十字架』は、法隆寺は子孫断絶の運命を背負った聖徳太子及びその一族の鎮魂の寺であるという説、『水底の歌』は、柿本人麿は流罪刑死したという説、『神々の流竄』は、『古事記』『日本書紀』の実質の著者は藤原不比等であり、出雲神話は大和の神話を出雲に仮託したものであり、大和から出雲へ神々は流されたという説を論じたものである。

『神々の流竄』の説について、私は後に著書『葬られた王朝―古代出雲の謎を解く』において、『古事記』『日本書紀』の作者は不比等であるという点についてはより詳細に証明したが、大和の神々が出雲に流されたという説は誤りであり、スサノオ、オオクニヌシの出雲王朝はたしかに実在したと論じ、自説を訂正した。

これらの日本研究の方法は哲学的であったと思う。それは「疑い―仮説の直観―演繹法及び帰納法による証明」という方法であり、デカルトの方法であったと思われる。

② 縄文文化の研究とアイヌ文化

私は八世紀の日本文化を考察し、日本文化は奥が深いと感じた。日本の基層文

化は何であろうか。

日本は約一万六千年前から約二千年前まで縄文時代であった。日本に稲作農業が入ってきたのは約二千年前である。とすれば、縄文時代が一万四千年続き、弥生時代はわずか二千年ということになる。それゆえ日本の基層文化は縄文文化であるといわねばならない。それは漁労採集文化であり、その文化が日本列島で甚だ豊かな花を咲かせた。その文化的遺産が、岡本太郎の激賞した縄文土器や土偶である。

縄文時代の死生観が最近まで日本に残っていたと思われる。和食がユネスコの無形文化遺産に登録される見通しになったというが、和食といえば、刺身であり、寿司であり、蕎麦である。コメの飯の上に生魚が乗った寿司はまさに縄文文化と弥生文化が融合した料理であり、日本文化を象徴するものであるといえよう。

縄文文化を忠実に受け継いでいるのはアイヌ文化である。日本文化研究にはアイヌ文化研究が必須であると私は思う。

③　中世日本の研究

中世のすぐれた文化として、宗教と芸術がある。私は宗教のなかでも特に浄土仏教にひかれ、十四年前に著書『法然の哀しみ』を書いた。

現在、親鸞の研究にあたっている。親鸞の玄孫、存覚の著書『親鸞聖人正明伝』をもとにして親鸞の人生を考えている。『正明伝』はこれまで偽書とされてきたが、決して偽書ではない。『正明伝』によって考えると、親鸞の甚だドラマチックな人生がよく理解され、また仏教史における浄土真宗の革新的意味も十分理解される。

私はここ八年ほど、能の研究に没頭していた。能といえば世阿弥であるが、世阿弥は複式夢幻能を創出した大天才である。世阿弥ばかりではなく、観阿弥、元雅、禅竹、信光もすべて世阿弥とは異なる能を書いた天才である。能はやはりすばらしい。

三、私の芸術

私は三代目市川猿之助（現・猿翁）との交友によって、スーパー歌舞伎「ヤマトタケル」を書いた。自分には創作の才がないと思って哲学者になった私にそのような歌舞伎が書けるとは思っていなかったが、猿之助の依頼でやむなく書いた「ヤマトタケル」が大当たりをとり、今や古典になった。その後も二作の歌舞伎「オグリ」及び「オオクニヌシ」を書いた。

また茂山千之丞との縁によって、「ムツゴロウ」「クローン人間　ナマシマ」「王様と恐竜」という三作の狂言を書いた。「王様と恐竜」はパリでも上演され、好評であった。

能についても、かつて新作能「河勝」を書いたが、二作目として、国立能楽堂の依頼で、世阿弥生誕六百五十年を記念してスーパー能「世阿弥」を書き、今年四月に初演された。これは碧南市でも上演された。

スーパー能『世阿弥』碧南公演

四、管理職としての人生

京都大学の大学院を修了し、龍谷大学、立命館大学に勤めた後、京都市立芸術大学に教授として赴任したが、思いがけず学長になった。その後、国際日本文化研究センターの創設に尽力し、初代所長を八年間務めた。このように管理職を長年務めることは、歌舞伎を書くこととともに私の人生の計画にはなかったものである。

人生とは不思議なものであるが、このような私の人生は稀なる幸福な人生であったといわねばならない。そのような人生を送ることができたのは多くの人のおかげであろう。

瞑想回廊企画展示

瞑想回廊企画展示は、哲学たいけん村のコンセプトに則り、訪れた人の「視覚」と「感性」に訴えかける美術展として、開村以来毎年開催しています。平成二十五年度は、十月二日から十二月二十七日にかけて第三十九回企画展示「聖なる場所の記憶」三浦篤正展を開催しました。

聖なる場所の記憶　三浦篤正展

作品「森象No.48」

三浦氏は、岡崎市出身の作家です。檜を薄い竹ひご状にしたものをシンメトリーに編みこむように重ね、膠で留めて成形した作品です。ほぼ全ての作品のタイトルには、「森象」と付けられており、作品全体で概観した森を表しています。

今回の展示では作品十九点を出展していただきました。

伊藤証信 梅原猛名誉村長 常設展示

哲学たいけん村無我苑にゆかりのある伊藤証信と梅原猛名誉村長とを紹介する常設展示。平成二十五年度はそれぞれ次の展示を行いました。

伊藤証信常設展示

遺品の紹介を通じて、伊藤証信の生涯を順に紹介しています。今回、武者小路実篤、赤松常子等との関わりを示す遺品を紹介しました。

梅原猛名誉村長常設展示

梅原猛名誉村長の手がけたスーパー能『世阿弥』の内容と著書『神々の流竄』『葬られた王朝』の内容について紹介しました。

「観月の会」

▼出　演▲
筑前琵琶奏者
シルヴァン・旭西・ギニャール氏

平成二十五年十月十九日、哲学たいけん村無我苑研修道場にて、「観月の会」を開催しました。今回は、スイス出身の筑前琵琶奏者のシルヴァン・旭西・ギニャール氏をお迎えして、琵琶の響きを楽しみました。

不安定なお天気だったため、今回は室内での鑑賞となりました。短い時間の中、筑前琵琶についての解説や「祇園精舎」のオリジナル曲などを披露していただきました。

また、二部終了後は、どうして外国人の方が筑前琵琶を始めたのかなどの質問にもお答えいただき、アットホームなコンサートでした。

お知らせ

涛々庵茶会・三曲定期演奏

涛々庵茶会は無我苑の市民茶室涛々庵（とうとうあん）を使用した市民茶会です。毎月席主によってそれぞれに創意工夫がなされ、華やかな茶会となっています。また、茶会に華を添える箏、三弦、尺八による三曲の定期演奏も研修道場安吾館にて行っています。

平成二十六年度の涛々庵茶会は、毎月第四日曜日（十二月のみ第三日曜日）に開催します。料金は一服四百円、時間は各日とも十時から十五時まで（立礼茶席は十六時まで）です。三曲の演奏はお茶会にあわせ随時観覧無料で行っています。

お茶会の作法についてご存知ない方もお気軽にご参加いただけます。また、三曲の演奏はお茶会に参加しない方もお聞きいただくことができます。是非、一度涛々庵茶会の雰囲気をお楽しみください。

平成２６年度涛々庵茶会・三曲演奏予定表

月　日	涛々庵茶会		三曲演奏
	席主	流派	出演団体
4月27日	神谷美枝子（宗美）	表千家	若草会
5月25日	澤田　教子（宗教）	表千家	鈴木祥子社中
6月22日	永井いく子（宗郁）	裏千家	絲音の会
7月27日	藤原知香子（宗知）	裏千家	若草会
8月24日	小林ミサ子（宗実）	裏千家	鈴木祥子社中
9月28日	杉浦　時子（宗時）	宗徧流	
10月26日	小沢わさ子（宗和）	松尾流	鈴木祥子社中
11月23日	杉浦みどり（宗翠）	裏千家	山本加代子社中
12月21日	小島　和美（宗美）	裏千家	絲音の会
平成27年 1月25日	小林ミサ子（宗実）	裏千家	若草会
2月22日	杉浦　伸子（宗伸）	裏千家	鈴木祥子社中
3月22日	小笠原芙美（宗文）	久田流	絲音の会